

価値章標流通下の価格の度量基準

——17世紀末イギリスの磨損鑄貨流通に関連して——

松 本 久 雄

目 次

はじめに

I 富塚文太郎氏によるマルクス貨幣論への批判について

II 磨損鑄貨流通下の価格の度量基準

——17世紀末のイギリスのばあい——

(1) 『経済学批判』におけるマルクスの叙述

(2) 17世紀末のイギリスの実情

(3) マルクスの説明が含む問題点

(4) ダウナントによる事態の解明

III むすびに代えて

はじめに

「価格の度量基準の事実上の変更(切り下げ)による物価騰貴」というのがインフレーションの基本的規定である、という見解はわが国のマルクス経済学者の間では通説となって定着していると思われたが、最近この通説にたいするひとつの反省が勢いをえてきているように見える。それは、紙幣の減価と価格の度量基準の事実上の変更(切り下げ)とを厳密に区別しようとする立場であり、この立場は、戦後間もない時期に発表された遊部久蔵氏の所説¹⁾に端を発しており、その後三宅義夫氏によって批判された²⁾が、なお大島雄一³⁾、

1) 遊部久蔵『インフレーションの基礎理論』, 思潮書林, 昭和23年。

2) 三宅義夫『貨幣信用論研究』, 未来社, 昭和31年, とくに第三章参照。

3) 大島雄一『資本論講座』第1巻への書評, 『経済科学』第11巻第4号所収。

久留間健⁴⁾などの諸氏によってひき継がれてきたものである。それが最近になって、少くとも筆者の目につくほどにまで、勢いをえてきている⁵⁾この理由としては、金と各国通貨との固定した比率での交換性が全面的に失なわれている下で、金はどのようにして今日価値尺度機能を果たしているのか、という問題にたいして、マルクス貨幣論を支持する立場からの有効な回答が見出しえない現実が背景にあることはいうまでもないが、もっと直接的には、これと関連して、従来のマルクス貨幣論の理解にたいする富塚文太郎氏による大胆な批判が、大きく影響しているように思われる。

筆者は、1オンス=35ドルの金価格の固定を価格の度量基準の固定と解する立場から、その下で進行した持続的物価騰貴を、通説の規定からすれば、インフレーションとみることはできない、という形で間接的に通説を批判してきた。⁶⁾なぜ、インフレーションの規定を真正面から取り上げなかったかといえば、筆者の主要な関心がそこにはなかったからであるが、筆者の立場からすれば、貨幣論の次元でのその規定は、「価格の度量基準の変更（切り下げ）をとともなう物価騰貴」とでも、通説を修正すれば十分である。したがって、遊部氏の所説の流れを汲む人々と筆者とが、必ずしも共通の問題意識をもつわけではない。とくに富塚氏との差異は明白であり、遊部氏の問題提起は富塚氏によって、マルクス貨幣論にたいする全面的否定にまで発展させられている。そこで小稿の前半では、富塚氏の主張をごくかいつまんで要約し、その主要論点にたいするコメントの形で、筆者の従来の見解をあらため

4) 久留間健「独自の物価騰貴としてのインフレーションの概念規定の確立のための一試論」、『金融論研究』（渡辺佐平還暦記念論文集）法大出版局、昭和39年、所収。

5) 筆者の目についたものとしては、井汲明夫「紙幣減価論の擁護」I～IV、『城西経済学会誌』第10巻第1号～第13巻第1号。同「価格論なき価格論——富塚文太郎氏のインフレーション論への批判——」、『金融経済』185号。岩下有司「インフレーションと価格の度量標準——価格標準の事実上の切下げ説批判——」、『中京商学論叢』第25巻第4号、などがある。

6) 拙稿「金価格引き上げの可能性について(上・下)」、『証券経済月報』第34号、第38号（昭和37年5月、9月）、「米国の物価騰貴と金問題」、『経済学雑誌』第51巻第2号（39年8月）、「金の価格と物価水準」、『経済学雑誌』第60巻第1号（44年1月）など参照。

て提示することを試みた。

とはいっても、通説に代表されるわが国のマルクス貨幣論の理解には、富塚氏が指摘されるような、いくつかの問題点が存在することは否定できない。また、富塚氏のばあいは、あまりに通説の影響が大きかったために、通説にたいする批判がそのままマルクスにたいする批判となった、という点はあるかもしれないが、しかし、マルクス自身の叙述に、——とくに、富塚氏も重視されている、『経済学批判』における鑄貨流通に関連する叙述に——そのような理解を生む根源が、実際にあることも確かと思われる。そこで小稿の後半では、17世紀末のイギリスの磨損鑄貨流通下で起った現象についてのマルクスの説明を、当時の物価・為替および金銀相場の動きなどに照らして検討し、それが含む問題点を明らかにしようとしたのである。

小稿が扱うのは、もちろん、今日とは全く異なる条件下での問題であるが今日の問題に接近するための、ささやかな足ならしぐらいの意味はもつかもれない、と思っている。

I 富塚文太郎氏によるマルクス貨幣論への批判について

富塚文太郎氏は、約10年ほど前に続いて発表された二つの論文「紙幣減価論の批判」⁷⁾（以下第1論文と呼ぶ）「紙幣＝名称主義理論の構造」⁸⁾（第2論文と呼ぶ）において、「マルクス貨幣論を解体に導くものである」（第2論文、12ページ）との自負をもって、批判を展開されている。第1論文と第2論文の内容が全く同じわけではない（第2論文の方がより論旨が整理されている）が、その基本的主張に変わりがあるわけではなく、また重複する点もあるので、両論文を一括してその論点を整理してみることにする。

富塚氏の主張は、一言で要約すれば、次のようである。すなわち、価格の度量基準の固定性の保証が失なわれている、紙幣の専一的流通および磨損鑄

7) 富塚文太郎「紙幣減価論の批判」、『東京経大会誌』80号（1972年12月）。

8) 同「紙幣＝名称主義理論の構造」、『経済研究』第25巻第1号（1974年1月）。

貨の流通においては、マルクスによって説かれている、金の価値尺度機能および価格の度量基準としての機能は立証することができない。このことは、「マルクスの価値尺度論、価格標準論に根本的な問題があること」（第1論文、29ページ）を示すものである、と。

ではなぜ、紙幣の専一的流通下（または磨損鑄貨の流通下）では、金の価値尺度・価格標準の機能が立証できないのだろうか。富塚氏が挙げておられる論拠は、大まかにいって、次の四点に集約しうると思われる。

第一は、三宅義夫氏が主張されているように（そして富塚氏はマルクスも同じ見解とみられるのだが）、紙幣の流通下では価格の度量基準が不確定である、ということは、価格の度量基準が機能していない、ということの意味するが、価格の度量基準が機能していない時に、どのようにして商品の価値は一定の金量として表示されうるのか、およそ価格なるものは成立しえないことになるのではないか（第1論文、11、14ページ、第2論文、1ページ）、ということである。

第二に、紙幣の価値が、流通必要金量と流通している紙幣の分量とによって直接に決定される、ということは、商品の価格が決定される前に流通手段の価値が決定されること、さらにいえば、商品の価格が流通手段の分量によって決定されることになり、これはまさにマルクスによって厳に否定された貨幣数量説ではないか。（第1論文、10ページ、第2、6ページ）

また、流通必要金量は、重量名で規定されれば、紙幣の分量と関係なく確定されるだろうが、そのばあいには、商品の価格も金の重量名で表わされなければならない、しかし、そのような価格は存在しないから、流通必要金量は貨幣名で表わされるとすれば、紙幣の流通量とともに流通必要金量も変動するのであり、紙幣の「過剰」という概念は成立不能となる。（第1、10～11ページ、第2、6ページ）

第三に、紙幣の過剰発行による物価騰貴は、価格の度量基準の事実上の切り下げによるものだから、純粹に名目的なものである、ということになるが、

それでは、いわゆる、デノミネーションの変更と同じものになってしまう。だが、現実のインフレーションは、価格体系の変化を伴うものであり、過剰需要によってのみ説明されうるものである。(第1, 21, 29ページ, 第2, 8ページ)

第四は、磨損鑄貨流通下および紙幣流通下で生じた金(または銀)市場価格の騰貴も、マルクスの説明と合致しない現象を伴った、ということである。

磨損鑄貨が流通した例としては17世紀末のイギリスがとりあげられ、そこでの銀市場価格の上昇が、①銀貨の磨損度に比例しなかったこと、②一般物価の比例的上昇を伴わなかったこと、の二点からマルクスの誤りが指摘されている。(第2, 5ページ)

また、紙幣流通の例としては、グリーンバックス時代のアメリカがとりあげられ、そこでは、①金の市場価格は、紙幣の増発の度合いに応じてではなく「市民戦争と紙幣流通下におけるアメリカの政治経済の状況とその見通し、それによって影響されるドルに対する評価、信頼度」によって変動したこと、②金の市場価格の変動は、金の現送点を変動させ、その現送点が為替相場の変動を限界づけることによって、輸出入商品の価格に影響する、という形で物価に影響していたのであり、金の価格の変化から直接に商品の価格が一斉に変動したわけではないこと、の二点が指摘され、そのことを根拠として、「紙幣の量によって紙幣の価値したがって計算貨幣の価値が決定され、その紙幣の価値が金相場として現われる」といった関係は存在しなかったこと(第2, 11ページ)、したがって、「金価格を価格の標準としての金の貨幣名だとするマルクスの基本命題にこそ問題があり、金価格の価格としての実存在を認めなければならないこと」(第2, 12ページ)が主張されている。

以上、富塚論文を一応要約してみたが、以下では、私見を再確認する意味をもかねて、ほぼ上の順序にしたがって、これらの論点にたいしてコメントを試みることにしたい。

- (1) 価格の度量基準が、紙幣流通下では、固定性を失なう、という点について。

「価格の度量基準たるためには、金のある一定量が度量単位として固定されなければならぬ。……だから、まったく同じ分量の金が度量単位として不変的に役だてば役だつほど、価格の度量基準はそれだけよくその機能を果たすことになる」⁹⁾ とマルクスが言っているように、度量単位として役立つべき金の分量が固定されなくなれば、価格の度量基準としての機能がそれだけ低下することは争えない。しかし、機能が低下するということは、機能がなくなるということとはちがうし、ましてや、価格の度量基準がなくなってしまうことではないだろう。単位貨幣名をもつ度量単位がなくなってしまうならば、たしかに富塚氏のいわれるように、金の重量名が商品の価格をあらわす以外にはないことになるが。そこで、価格の度量基準としてよく機能しなくなる、とはどういうことかを少し考えてみたい。

紙幣流通下であっても、金が貨幣商品であることに変わりはないとすれば、金の「価格」は金に付された貨幣名以外ではない。逆に言えば、単位貨幣名があらわす金量が、価格の度量基準として機能すべき金量であることに変わりはない。したがって紙幣流通下であっても、IMF体制下のように、金の価格が固定されていれば、価格の度量基準として機能すべき金量は固定されていたのである。金の価格の固定性を維持するメカニズムが失なわれている下では、金の価格は需給関係によって絶えず変動するようになる。それにつれて、単位貨幣名があらわす金量も当然変動する。ところで、単位貨幣名のあらわす金量は、たとえ絶えず変動しているにしても、貨幣商品たる金量を度量する基準として機能しうることは云うまでもない。5オンスの金がつねに1オンスの金の5倍であるように、時価5ドルの金は時価1ドルの金の5倍であることは、1ドルがあらわす金量がいかに変動しても、変ろうはずがな

9) 『資本論』長谷部文雄訳、青木文庫版、第1分冊、22ページ。

い。しかし、この貨幣（金）の度量基準が価格の度量基準として機能するためには、少なくとも、一定期間の固定性が必要である。というのは、金の価格が変動したばあい、新しい価格をもった金で諸商品の価値が評価され直すには一定の期間が必要だろうからである。だから、金の価格が絶えず変動するような状態の下では、ある価格をもった金によって諸商品の価値が評価され直す前に、金はまた新しい価格をもつ、という状態がくり返されるわけで、商品の種類がちがえば、その価値を表現している金のもつ貨幣名もちがう、といった事態が現出する。もっともこのばあい、最新の価格をもつ金でその価値を表現している商品との関係を通じて、他の諸商品もその価値表現を修正してゆくのだが、金の最新の価格が絶えず変動するために、この修正過程もまた絶えることなく続く、ということになるのである。これが、価格の度量基準としての金の機能が低下している、という意味ではないだろうか。

このように考えることが当たっているとすれば、紙幣流通下で「マルクス経済学者は、いったいどのようにして商品に価格がつけられると考えるのか」という富塚氏の疑問（第1, 11ページ）は解消するのではないだろうか。

(2) 紙幣の価値がその流通量によって決定される、という点について。

この命題は、紙幣の流通額が、鑄造価格であらわした流通必要金量の額を越えたばあいについてのみ、適用されるのであって、それまでは、流通に必要な紙幣の量が、鑄造価格であらわした流通必要金量によって、規定されるのである。換言すれば、金の価値尺度機能と価格の度量基準としての機能にもとずいて確定された商品の価格によって、流通に必要な紙幣の量は規定されているのである。紙幣の流通量がこの限界を超えることによって生ずる独自の事態は、流通過程からの反作用として理解しうることであり、その意味では、磨損鑄貨流通のばあいに、一定の条件の下では、鑄貨から価格の度量基準へ反作用が生ずる、というのと同じと考えられる。もしこの種の反作用を否定してしまえば、規定するものと規定されるものとの関係を、一面的に

のみ捉えることになってしまうのではなからうか。

(3) 紙幣の増発の基準となる流通必要金量は、重量名でなければ確定されえない、という問題について。

貨幣商品たる金の量が、重量名とは異なる貨幣名をもつ度量基準によって量られるかぎり、諸商品の価格はこの貨幣名であらわされているはずだから、その価格を実現するに必要な金量（流通必要金量）も当然貨幣名で確定されなければならない、ということは首肯できる。しかし、そのことによって紙幣の過剰が確認されなくなるとは思われない。当初は鑄造価格であらわされていたこの流通必要金量を超えて紙幣が増発されることによって、この必要金量の貨幣名も事実上引き上げられるが、それが引き上げられる度合いによって、商品の価値総額が不変なかぎり、当初の流通必要金量にたいして紙幣が増加された比率が確認されるだけのことである。もし、この間に起きた商品の価値総額の変化をも考慮するとすれば、両時点での金の価格の変化によって、増発の度合いを占うしかない。増発の出発点となる金の価格はなにも鑄造価格に限定する必要はない。増発がすでに進行したある時点での金の価格を基準として、それ以降の時点での金の価格との比較によって、基準とした時点以降の紙幣の増発の度合いを知ることは、理論的には可能のはずである。大体流通必要金量というのは理論的にのみ確定しうる概念なのだから、紙幣の増発の度合いを反映するかぎりでのみ、金の価格が上昇するものと理論的に想定すれば、貨幣名であらわした流通必要金量が、十分に紙幣増発の基準となりうると思われるのである。もっともこのばあい、増発の指標は金の価格だけで十分ということになるかもしれないが。

(4) 紙幣の過剰発行による物価騰貴の名目性について。

これは、鑄造価格であらわした流通必要金量が不変であり、諸商品間の相対価格も不変である、という想定の下で展開された抽象的次元での説明では、そうならざるをえないということにすぎない。現実の過程では、流通必要金量も変動するだろうし、商品間の相対価格（富塚氏のいわれる「価格体系」）

も変化するだろうから、紙幣の過剰発行による物価騰貴といっても、マルクスの設例とは全く異なる様相を呈することは当然である。問題は、極めて抽象的な次元でのマルクスの説明を、現実の過程にそのまま適用しようとすることから発生するのであり、まさにマルクスの方法にたいする無理解としか云いようがない。とはいっても、17世紀末の磨損鋳貨流通下のイギリスで起った現象については、マルクス自身がこの抽象的理論を適用しており、そのことがマルクス追隨者をして同じ誤りに導いた可能性は大きいと思われるのだが、この点は後述にゆずる。¹⁰⁾

(5) 価格の度量基準の変更とデノミネーションの変更の同一性。

価格の度量基準の変更は、単位貨幣名があらわす金量の変更であり、換言すれば、一定量の金に付される貨幣名の変更である。だから金の「価格」の変更だけを直接には意味する。そして、この新しい「価格」をもった金によって諸商品がその価値を尺度され直すのは、非産金国のばあいには、外国為替の名目的変動を通じて、まず輸出入商品においてそれが行なわれることから始まる、一連の市場メカニズムを介してのことである。これに対して、いわゆる「デノミネーション」のばあいは、金の価格だけでなく、すべての商品の価格ないし貨幣約束（既発行の紙幣、預金その他の債権・債務）の金額が一斉に、たとえば100分の1に、変更されるのである。これは何らの市場メカニズムとも無関係に実施される法的な変更にすぎない。だから、これと価格の度量基準の変更とは混同しようがないのである。これを混同するのは価格の度量基準の変更についての、抽象的次元でのマルクスの説明を、そのまま現実についての説明と混同する誤りにもとづくものであることは(4)と同じである。

(6) 紙幣の過剰とは、「過剰購買力、過剰需要の問題である」(第2, 8ページ)という点について。

10) 小稿の第II節の(3)を参照。

いかに紙幣がそれ自体としては無価値であるにしても、価格以上の紙幣を手放して商品を購入する者はいない、という意味では、流通に必要な紙幣が流通に入るはずはない。その意味で、紙幣の過剰を過剰需要の問題として捉えることは同感である。しかしそのばあいには、紙幣の過剰による需要超過と、紙幣の過剰によらない需要超過とをどう区別するのか、という問題が生ずるはずである。けだし、金本位制下でも需要超過によって物価が全般的に騰貴したことはよく知られているからである。ところが、富塚氏にはこのような区別は見当らない。氏は、「流通必要金量とは、均衡価格（マルクスがいう価値と一致した価格）で実現されるべき商品の総額の流通に必要な流通手段の量のことである」（第2，8ページ）と規定し、紙幣の過剰とは、この「均衡価格」から商品の価格を乖離させる「過剰需要」である、といわれている。この規定には両者の区別がないというだけではない。まさに紙幣の過剰によるものではない物価騰貴が、紙幣の過剰によるものとされているのである。(3)でみたように、貨幣名であらわした流通必要金量にはすでに紙幣の減価が反映されているはずであるのに、氏の規定では、物価水準以上に騰貴した商品の価格だけが、紙幣の過剰を表わすとされているのだからである。また、流通必要金量とは、それによって実現される商品の価格が価値通りかどうかとは無関係な規定であるのに、氏はそれを価値通りの価格に限定されるのだから、まさに実質的な価格騰貴だけが、紙幣の過剰によるものとされるのである。

過剰な需要によって起った物価の全般的騰貴が、紙幣の過剰によるものかどうかは、金の市場価格の持続的な高騰を伴っているかどうかによって、判断するしかない。金の市場価格が従来水準に安定しているかぎり、いかに物価が全般的に騰貴しても、それは、商品に対して金の相対的価値が低下したことを意味するだけで、これを紙幣の過剰とすることはできない。この金の価格をはなれては、物価騰貴が紙幣の過剰によるものか否かを区別する基準はないのである。

(7) グリーンボックス時代のアメリカにおける金市場価格の動きについて。

マルクスの貨幣論に則して説明を要求されている問題が二つあり、その第一は、金市場価格が紙幣の増発の度合いに応じて騰貴したわけではない、ということである。

これは、紙券の減価、すなわち、金価格の騰貴が、紙券の増発によってのみ起こるとマルクスが言っている、と思いきこんでいることから生じた誤解にすぎない。マルクスは『経済学批判要綱』の中で、兌換停止下では金は銀行券にたいして「一種独特な商品になる」と言っているが、¹¹⁾ それに続く箇所では、ターレル紙幣の減価に三つのばあいがあることを指摘して、「政府にたいする信用が根本からゆらぐか、またはこの紙幣が流通の必要以上に発行される」ばあいのほかにも、「銀にたいする特別な需要が、たとえば輸出のための需要が、ターレル紙幣にたいする1つの特権を銀にあたえるならば、ターレル紙幣は減価するだろう」と言っている。¹²⁾

すなわち、紙幣（あるいは不換銀行券）にたいして「一種独特な商品」となった金（あるいは銀）は、自身にたいする需要と供給の関係でその価格を変動させるようになるのである。だから、紙幣の増発とは無関係に金の価格が変動しうるのが、むしろ紙幣流通下の特徴といえる。では、需給関係で変動する金の「価格」は、もはや金に付された貨幣名ではなく、他の商品のそれと同様の価格になったことを意味するのだろうか。紙幣の専一的流通下であっても、金が貨幣商品であることが肯定されるかぎりには、金に価格があるはずがない。しかし、その金に付された貨幣名であるはずの金の「価格」が、紙幣の流通下では、金の相対的価値の変動をも表現すると、一定の限定つきで、いうことができる。それは次のようにしてである。

金の「価格」が固定されているばあいには、金の相対的価値は、その一定量と交換される他のすべての諸商品の量において表現されていた。つまり、

11) 『経済学批判要綱』高木幸二郎監訳、大月書店、第1分冊、52ページ。

12) 前掲書、54ページ。

諸商品の価格表が金の相対的価値を、さかさまにはあるが、表現していたのである。だからそのばあいには、金の相対的価値の変動は、物価水準の変動において逆方向に、表現された。ところが金の「価格」が金にたいする需給によって変動するようになると、諸商品の価格は相対的に安定したままで、金の相対的価値の変動を表現しうるようになる。つまり、金の「価格」が騰貴すれば、同一貨幣名があらわす金の量は減少したのであり、金の相対的価値が不変であるためには、商品の価格は一斉に同じ比率で騰貴しなければならない。ところが商品の価格は、金と共に騰貴すべき理由がなく、不変にとどまるとすれば、その不変の商品価格は、今やヨリ少量の金を意味するわけだから、金の相対的価値が増大したことを表わすのである。金の「価格」が下落したばあいも同様である。

要するに、変動する金の「価格」と比較した商品の価格水準が、金の相対的価値の変動を表わすのだが、商品の価格が相対的に安定しているものと前提すれば、金の「価格」が、金に付された貨幣名という性格を失なわないままに、金の相対的価値の変動をも表現する、ということができるのである。金が「一種独特な商品になる」といわれる意味もここら辺にあると思われる。

次に、説明が要求されている第二の問題は、金の市場価格の変動が物価に影響したのは為替相場を通じてであった、ということである。

これは、紙幣の過剰発行がまず起って、それが物価騰貴→支払差額の悪化→為替下落→金の市場価格の上昇、という経過をとるのは逆に、まず金の市場価格が上昇し、それが物価に波及していった実例だから、価格の度量基準の切り下げがいかにか物価に影響するか、という問題で(5)で説明済みのことである。また、金の「価格」の騰貴が、それだけで直ちに物価を上昇させる理由がないことは、第一の問題に関連して、今みたばかりである。だからここでは説明をくり返す必要はない。しかし、このことを根拠にして、金の「価格」が金の貨幣名であることを否定され、「金価格の価格としての実在性を認めなければならない」(第2, 12ページ)といわれることは、金

はもはや貨幣ではないと主張されることになるが、そのばあいには、なぜ貨幣でない一商品の価格によって、為替相場の変動水準が規定されることになるのか、が説明不能になると思われるがどうだろうか。

(8) 最後に、磨損铸貨流通下の17世紀末のイギリスでの銀の市場価格の騰貴に関連して提起されている問題について。

この問題は氏の第1論文でも扱われているのであるが、第2論文では整理されて論点も明確になっている。17世紀末の大改铸直前のイギリスの実例に照らして、氏は言われる。

磨損铸貨流通下の「金（銀が本位貨なら銀）の市場価格の騰貴についてのマルクスの説明は基本的には2つの点で誤まっている。第1は、金貨の実質金量の減少という事実をもとに、金貨の全体を铸貨としてでなく、重量での金として評価し、そこから、金の市場価格は金貨の実質金量の減少率に逆比例して騰貴するものと考えた点である。この点は、本来のマルクス自身の铸貨論とも矛盾する点である。第2は、金の市場価格の騰貴率と同じ率で、一般商品の価格も騰貴すると考えた点である。この点は、金が商品価値の尺度、価格の度量標準であるとするマルクスの基本的考えにもとづくことで生まれた誤りである。」(第2, 5ページ)

第2の点は、すでに今までの釈明の中で明らかにされていることと重複するが、第1の点は、はたしてマルクスがそう考えているかも疑問であるし、筆者自身が従来から抱いていた問題とも関連するので、それらを含めて、17世紀末のイギリスの事例については、節をあらためて、検討することにした。

II 磨損铸貨流通下の価格の度量基準

——17世紀末のイギリスのばあいについて——

(1) 『経済学批判』におけるマルクスの叙述

周知のようにマルクスは、その著『経済学批判』の中で、17世紀末のイギリスの実例をも参照しながら、铸貨流通の問題について繰り返し言及してい

る。鑄貨流通の問題とは、鑄貨は流通することによって不可避免的に磨耗し、その金属内実を失なうけれども、なお完全な金属内実をもつものとして機能しつづける、という「流通過程そのものによってなされる金属貨幣の第2の観念化」¹³⁾と、「どんなものでも自分自身の象徴になることはできない」こと、つまり、「金は自分自身の象徴となるが、しかも自分自身の象徴としてののはたらきをすることができない」¹⁴⁾ という矛盾から生まれるものである。

すなわち、「鑄貨は実践によって観念化され、その金や銀のからだの単にうわべだけの定在に転化される」¹⁵⁾のだが、「金の機能の内部におけるそのうわべだけの定在は、そのほんとうの定在と衝突するようになる」¹⁶⁾ のである。

このような衝突は、「鑄貨としての金と価格の度量標準としての金とのあいだの矛盾」¹⁷⁾ の表現であり、それによって、流通手段として観念化された金が「反作用的に、価格の度量標準であった法定の比率をかえてしまうことになる」¹⁸⁾ のである。

ところで、鑄貨としての金(あるいは銀)が価格の度量基準としての金(あるいは銀)に対しておこなう反作用の経路には、金(あるいは銀)の市場価格の騰貴を通ずるばあいと、一般商品の価格上昇を通ずるばあいと、二つがあることが示されている。

「もし4,672個2分の1のソヴリン金貨を天秤皿にのせたとき、1,200オンスではなく、平均して800オンスの重さしかないとすれば、それは、金市場にもっていても、やはり800オンスの金しか買えないであろう。いいかえれば、金の市場価格はその鑄貨価格以上に騰貴するであろう。〔もしそういうことになれば〕どの貨幣片もみな、たとえ完全な重さをもっているばあいでも、鑄貨形態では地金形態でよりも小さい価値でしか通用しな

13) 『経済学批判』武田、遠藤、加藤、大内訳、岩波文庫、139ページ。

14) 同上、142ページ。

15), 16) 同上、139ページ。

17) 同上、141ページ。

18) 同上、140ページ。

いであろう。そして完全な重さをもっているソヴリン貨は、多量の金が少量の金よりも大きな価値をもつ地金形態に復原されるだろう。こうした金属実質以下に下落することがじゅうぶんたくさんのソヴリン貨におよんで、金の市場価格がたえずその鑄貨価格以上に騰貴するまでになると、鑄貨の計算名は同じままであるだろうが、しかもそれ以後はこのあたらしい度量基準にしたがって鑄造されるであろう。金は流通手段として観念化されることによって、反作用的に、価格の度量標準であった法定の比率をかえてしまうことになるだろう。」¹⁹⁾ (引用①)

「価格の度量標準の名づけかた……の変動が、鑄貨の金位の変動によって直接に生じようとも、あらたなより低い度量標準にとって必要な数だけ紙幣片を増加することによって間接に生じようとも、どちらでもさしつかえない。……価値表章の総額が増加すれば、それと同じ割合で、それぞれひとつの表章の代表している金の量は減少するであろう。価格の騰貴は、価値表章がかわりに流通すると称する金の量に、その価値表章をむりやりに等置する流通過程の反作用にほかならないであろう。

イギリスやフランスの、政府による貨幣悪鑄の歴史をみると、価格が銀貨の悪化されたのと同じ比率では騰貴しなかったことが、しばしばみいだされる。これはもっぱら、鑄貨の増加された比率が、それが悪化された比率におよばなかったことによるものである。つまり商品の交換価値は、そのごは価値の尺度としてのこのより低い金属混合で評価され、この低い度量単位に相応する鑄貨によって実現されるはずであったのに、その金属混合がそれに相応する数量だけ発行されなかったからである。」²⁰⁾ (引用②)

引用文があまりに長くなるのを避けるため一部省略したが、引用②の前半は、流通必要金量（14百万ポンド）の15倍の額面総額の紙幣が流通に入った

19) 同上, 140ページ。

20) 同上, 154～5ページ。

ものと想定して、そのばあい起る価格の度量基準の事実上の15分の1への切り下げと、それを反映する商品価格の15倍への騰貴を説明しているのだが、後半では、政府による悪鑄のばあいでも、それによって価格の度量基準は直ちに切り下げられるわけではなく、²¹⁾ 鑄貨が増加された割合に応じてのみそれが行なわれることを、専ら商品の価格を指標として説明しているのである。小稿に直接関係するのはこの後半部である。

政府によって悪鑄が行なわれるばあいには、それが品位の低下によるにせよ軽量化によるにせよ、従来と同一の貴金属量からより多くの鑄貨が鑄造されるわけだから、その増加分がすべて鑄造手数料として政府に徴収されるのでないかぎり、その貴金属の鑄造価格は引き上げられるはずである。それにつれて貴金属の市場価格も当然上昇するだろう。ところが引用②ではこれらのことには少しも触れずに、専ら商品の価格を指標として価格の度量基準の変更の有無を判断しようとしているように見える。

またこれとは対照的に引用①では、鑄貨の磨損による価格の度量基準の事実上の変更がもっぱら、鑄造価格を越える金市場価格の持続的な高騰によって判断されており、物価の動向は全く無視されている。

そこで当然出て来る第1の問題は、価格の度量基準の変更の指標として本位金属の価格と商品の価格水準とどちらを選んだらよいのか、ということである。

さらに、引用①ではたしかに、富塚論文が指摘しているように、金鑄貨の金属内実の平均的な減少度に応じて金の市場価格が騰貴するかのように叙述されている。しかし、引用②では、鑄貨の悪化された度合いとは関係なく、

21) 遊部氏は、鑄貨の磨損のばあいと区別して、悪鑄のばあいには即価格標準の切下げを意味すると考えて、それを裏づけるものとして、『経済学批判』から同じ箇所を引用しておられる(遊部久蔵、前掲書、8ページ)が、これは明らかに読みちがいである。そのように読みとるならば、悪鑄と同時に鑄貨の金属実質が価格の度量基準として機能するのだから、鑄貨は価値章標たりえない。にもかかわらず、鑄貨は今や自分のもつ金量よりも大なる金量の代表物にならなければならない、という富塚氏の指摘される矛盾(富塚第1論文、27ページ)が生ずることになる。

ただ鑄貨の発行される数量に応じてのみ価格の度量基準の切り下げが生ずるといわれている。だから引用②からすれば、鑄貨はどれほど磨損または悪鑄されようともその数量さえ適正に維持されるならば、価格の度量基準の事実上の変更はないことになり、鑄貨としての金から価格の度量基準としての金への反作用を説明した引用①が否定されることになりかねないのである。

元来、磨損した鑄貨も完全な鑄貨と同じ機能を果たしうるとというのが鑄貨の本性的はず——もしそうでなかったら鑄貨は最初から存在しえないはず——だが、一体どのような条件の下で磨損鑄貨から価格の度量基準への反作用が起こるのだろうか。これが第2の問題であり、筆者がかねてからもっていた疑問である。

これらの問題にたいしてマルクスはどう答えているのだろうか。引用②に続く次の章句はそれへの手掛りを与えていると思われる。

「このことは、ロックとラウンズとの論争で解決されなかった困難を解決するものである。紙券にせよ悪鑄された金や銀にせよ、価値表章が、鑄貨価格にしたがって計算された金や銀の重さを代理する比率は、それ自身の材料によってきまるのではなくて、流通にあるその量によってきまるのである。」²²⁾ (引用③)

ここで「ロックとラウンズとの論争で解決されなかった困難」と呼ばれているものは、別の箇所でも、ロックがたちいることを用心ぶかくさけていた「微妙な経済問題」といわれている問題であり、「その問題というのは、為替相場も銀地金の銀鑄貨にたいする比率も、ともに、流通貨幣がその実際の銀量減損とはなはだしく異った割合で減価した事実を証明していた、ということである」²³⁾とマルクスは言っている。このばあい、マルクスが磨損銀貨の減価の指標を為替相場と銀地金の市場価格に求めていることは明らかである。つまりマルクスは、指標からみて当時の銀鑄貨の減価の度合いが、鑄貨のも

22) 『経済学批判』前掲訳書、155ページ。

23) 同上、95ページ、(注) 47。

っている銀量の減少の度合いに及ばなかった理由を、もっぱら商品の価格を指標として、価値章標の減価をその数量から説明している箇所で、説明しようとしたのである。だからマルクスは引用②のばあいでも、決して減価の指標として物価水準だけを念頭に置いていたわけではないことは確かであろう。だが、ロックとラウンズの論争では触れられなかった「微妙な経済問題」が、マルクスの説明によって解決されているだろうか。このことを、かの論争の行なわれた17世紀末のイギリスの実情に則して検討することから、先の二つの問題への解答もいとぐちを得られることになると思われる。

(2) 17世紀末のイギリスの実情

ウィリアムⅢ世治下のいわゆる大改鑄 (Great Recoinage)が行なわれる直前には、イギリスの銀鑄貨の磨損度がかなりひどいものであったことはよく知られている。1695年9月12日にラウンズが財政委員会に提出した報告²⁴⁾に含まれている国庫出納人の記録によれば、同年の5、6、7の3カ月間に無差別に収税所 (the Receipt of the Exchequer) にもちこまれた、額面金額100ポンドづつを袋詰めにした572袋の銀貨の重さは、221,581オンス16ペニウエイト8グレイン・トロイあるべきところ、実際には113,771オンス5ペニウエイトしかなく、不足分は107,647オンス11ペニウエイト8グレインに達していた。²⁵⁾ つまり、国庫へ払い込まれた鑄貨から判断するかぎり、当時流通していた銀鑄貨の平均重量は約50%近くにまで減少していた、と考えられるのである。

このような銀貨の磨損がいつから起ったものかは明らかではないが、1680年代末にはすでに磨損がかなり進んでいたことを示すデータが存在する。それは1688年に埋められて1923年にブリストル (Bristol) の旧税関の建物の下から発掘された、5,267個の銀鑄貨である。その鑄貨の内訳は、エドワード

24) William Lowndes, "A Report Containing an Essay for the Amendment of the Silver Coins", 1695, in J. R. McCulloch, ed., *A Selection of Scarce and Valuable Tracts on Money*, 1858, pp. 169~258.

25) *ibid.*, p. 228, p. 258.

IV世期のもの10, フィリップ=メアリー期19, エリザベス期1,899, ジェームズI世期578, チャールズI世期2,364, そして1660~2年, つまりチャールズII世初期, のハンマー製鑄貨112であり, 他方, 1663年から鑄造されている機械製の鑄貨はわずかに, チャールズII世期のもの154とジェームズII世期の17にすぎず, これだけが最後の26年間の鑄造を代表するものであった。チャールズII世は非常に大量の機械製のクラウン貨と半クラウン貨を流通させたといわれるが, 削り取りのしにくい機械製鑄貨は流通から引き上げられてしまい, 稀にしかみられなかったことが, 以上の構成からうかがい知られる。大量に掘り出された初期の鑄貨は, その過半数以上(2590個)が削り減らされており, そのうち2,446個からはミントマークもなくなっているほどで, 少くも鑄貨の銀量の三分の一が失なわれていた, といわれる。²⁶⁾

このように, 削り取りによって拍車をかけられた銀鑄貨の磨損が, 大改鑄直前に最も進んでいたにしても, かなり以前から相当な程度に及んでいたことは疑いえない。

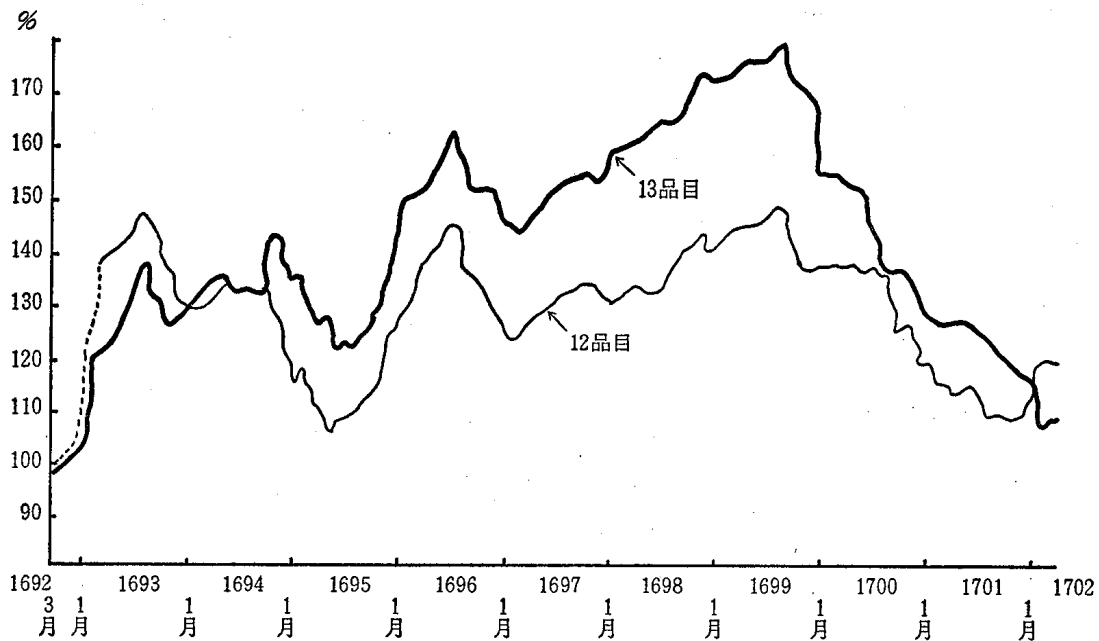
それではこういう状態の下で, 銀地金価格や為替相場および物価の動きはどのようなであったろうか。これらをホートン(John Houghton)の週報²⁷⁾によってみることにしよう。

この週報は, 1692年3月30日号から始まって1703年9月24日号で終るまで, 毎週金曜日に発行されているが, イギリスの各地における13品目の商品の価格表を各号に掲載している。13品目の内訳は, 小麦, ライ麦, 大麦, 麦芽, カラス麦, たちなた豆(horse beans), グリーン・ピース, ホワイト・ピース, 石炭, ホップス, 乾草, 獣脂, 羊毛, である。ホップスの値動きは, 他の品目とかけ離れて激しい(ロンドンでの価格は, 1ハンドレッド・ウェイト当り, 1692年6月の30シリングから1699年9月の280シリングにまで達し

26) Sir Charles W. C. Oman, *The Coinage of England*, Oxford, 1931. pp. 338~9.

27) John Houghton, *A Collection, for Improvement of Husbandry and Trade*, London Mar. 30, 1692~Sept. 24, 1703, reprinted in 1969.

第1図 イギリスにおける価格の動き(1692年3月—1702年3月)



注：このグラフは、ホートンの週報掲載の価格表から作成されたものである。

出所：Ming-Hsun, Li, *The Great Recoinage of 1696-9*, London, 1963, p. 9 より転載。

ている)ので、これを除いた12品目の価格の動きと、これをも含めた13品目の価格の動きとを、それぞれ総合してグラフに表わしたのが第1図である。

別の研究によれば、1660年頃から1690年頃にかけては物価は下落傾向をたどったことが示されている²⁸⁾から、1689年から始まった対仏戦争(War of Hapsburg League 1689~1697)の影響で、イギリスの物価は1692年の後半から上昇を開始し、94年の秋から下落に転じたものの、95年の夏から再び上昇に転じて96年夏にピークをつけ、その後97年初めまで反落したが、以降99年の夏まで上昇を続け、それ以後世紀の転換と共に急速な下落局面に移った、ということができよう。

では次に銀市場価格の動きはどうだろうか。ホートンの週報は1693年12月22日号から、金・銀地金やギニア金貨の相場を掲載し始めている。それによれば銀地金(それは銀鑄貨と同じく標準品位、つまり1ポンド・トロイの重

28) Ming-Hsun Li, *The Great Recoinage of 1696-9*, London, 1963, pp. 4~5参照。

第1表 金、銀およびギニア相場の変化

	金 オンス当り s. d.	銀 オンス当り s. d.	ギニア s. d.		金 オンス当り s. d.	銀 オンス当り s. d.	ギニア s. d.
<u>1693</u>				<u>1695</u>			
12月22	81 /	5 / 3	21 / 10	6月21	107 /	5 / 10	29 / 6
<u>1694</u>				" 28			29 / 7
1月5		5 / 3 $\frac{1}{2}$	21 / 11	7月5	107 / 6		29 / 9
" 12	80 /	5 / 2 $\frac{1}{2}$	22 / 10	" 12	108 / 6	6 /	29 / 10
" 9	80 / 6	5 / 3	21 / 10	" 19		6 / 1	
" 26	80 / 10	5 / 2		8月2		6 / 2	29 / 9
2月2	80 / 6	5 / 3		" 30	108 /	6 / 4	29 / 8
" 23			21 / 11	9月13		6 / 5	
3月2			22 /	" 20			29 / 6
" 23		5 / 2 $\frac{1}{2}$		" 27		6 / 2	
" 30	81 /	5 / 3		10月11	106 / 6		
7月20		5 / 2		" 18			29 / 4
" 27		5 / 2 $\frac{1}{2}$		" 25			29 / 3
8月3		5 / 3		11月8		6 / 3	29 / 4
" 31	81 / 6	5 / 4		" 15			29 / 5
9月14	81 /	5 / 4 $\frac{1}{2}$		" 22	108 /	6 / 4	29 / 7
" 28		5 / 4		" 29		6 / 5	29 / 9
10月5		5 / 4 $\frac{1}{2}$		12月13	—	—	29 / 6
11月23		5 / 5	22 / 3	<u>1696</u>			
12月7	81 / 6	5 / 4		1月10	—	5 / 11	
" 21			22 / 6	4月17	—	—	22 /
<u>1695</u>				7月10	82 /	5 / 2	
1月11	82 / 6		22 / 9	<u>1697</u>			
" 18	83 /	5 / 4 $\frac{1}{2}$	22 / 10	1月29	80 /	5 /	
" 25		5 / 5	23 /	4月23	—	—	—
2月1			23 / 4	<u>1698</u>	金	外国銀	
" 15	86 /			8月26	81 / 2	5 / 3	
" 22			25 /	9月2		5 / 2	
3月8	88 /	5 / 6		" 9	81 / 4		
" 15	90 /			" 23	81 /		
" 29	91 /	5 / 8		" 30	81 / 2		
4月12	92 /	5 / 7		10月21	81 / 4	—	
5月10	95 /	5 / 6	26 / 6	11月25	81 / 6	—	
" 17	98 /	5 / 3	28 / 4	<u>1699</u>			
" 24	103 /	4 / 2*	29 /	2月24	「不確定」		
6月7	106 /	5 / 6	29 / 8	3月2	79 / 8		
" 14	109 /	5 / 9	30 /	" 16	79 / 6		

* この4/2という数字は誤りと思われるが、ホートンの週報の数字なので、そのままにした。

- 注1) この表は、ホートンの週報から、相場に変化が生じた時だけの数字を写したものであり、空白は、それ以前の相場と同じことを示す。——は、相場が掲載されていないことを示す。
- 2) 1695年12月13日から金・銀地金相場が消えたが、銀のみ1696年1月10日から再現。同年2月14日よりギニア相場が消えたが、2月21日からは銀相場もなくなった。4月17日よりギニア再現し、7月10日より金・銀も再現したが値動きなし。
- 3) 1697年4月23日より、これらの項目自体が価格表から消え、1698年8月26日から、“Actions Old Money, Etc.”の箇所に復活。ただしギニアはなく、銀の代わりに外国銀となる。しかし、この外国銀の相場も同年の10月21日よりなくなり、1699年1月27日より項目自体が消えた。金相場だけは1700年6月21日まで、3l. 19s. 6d. (79/6)が続いているが、その後は意味不明となり、1701年4月11日より、外国鑄貨を含めて全部が“Actions Old Money, Etc.”から消える。

出所：J.E. Thorold Rogers, *The First Nine Years of The Bank of England*, Oxford, 1887, Table V による。但し数字その他はホートンの週報で確認した。

量中に11オンス2ペニウエイトの純銀、をもつ)の価格は、1694年7月までは1オンス当り5シリング2ペンスから5シリング3ペンスの間を変動していた(鑄造価格は5シリング2ペンス)が、それ以後上昇基調となり、1695年の5月に反落してからは急上昇となって、9月に6シリング5ペンスのピークをつけ、以後12月の初めまで高値が続いている(第1表)。ついでに金地金(22カラットの標準品位をもつ)をみると、これもほぼ同様な動きながら、94年一杯の足ぶみ状態から一変して、95年になると一本調子の急上昇となり、6月半ばに1オンス当り109シリングのピークに達し、それ以後12月初めまで高原状態を維持している。ギニア金貨の値動きも金地金とほぼ同様で、1695年6月半ばに30シリングのピークをつけ、翌年の2月半ばまでこれに近い高水準を保っている。

1695年12月13日の週報からは、金・銀地金の相場が掲載されておらず、銀のみ96年1月10日号から再開されたが5シリング10ペンスで値動きなく、2月21日号より再び銀相場もなくなった。96年の2月14日号からはギニア相場も消え、4月22日号から再現するがこれ以後は22シリングに固定している。これはギニアの流通価値の上限が、2月15日の議会決議で28シリングに抑え

られ、次いで28日から26シリングに低められたが、さらに法律によって4月10日以後は22シリングに抑えられたこと、²⁹⁾を反映するものである。(その後ギニアの上限は、1698年9月22日に21シリング6ペンスに下げられ、³⁰⁾さらに1717年12月22日の布告によって21シリングとされた³¹⁾。)

金・銀地金相場は1696年7月10日から週報に再現するが、銀は5シリング2ペンスの铸造価格に固定し、金も82シリングに固定したまま年を越え、97年1月29日号からは銀は5シリングと铸造価格を割り、金も80シリングに下落して、そのまま4月16日まで続き、4月23日号よりはこれらの項目そのものが価格表から消えてしまっている。これは、金・銀の価格が安定したために価格表に掲載する必要がなくなったことを意味すると思われる。金・銀の価格が安定したのは、いうまでもなく、磨損铸貨の回収と旧来通りの铸造価格による新銀貨の铸造の進行を反映している。1695年11月22日に議会を通過した铸貨規制のための最初の法律は、1696年5月4日までは、すべての磨損铸貨を完全な铸貨と同じ価値のものとして、国庫への支払いにおいて受けとることを義務づけたが、³²⁾それ以降に磨損貨幣を合法貨幣と同じように受けとった者は、受けとった銀の2倍の罰金が課せられる、ということも立法されたのである。³³⁾

しかし、1697年1月末からの銀地金価格の铸造価格以下への下落は、単にそれだけではなく、外国へ銀を輸出する必要がなくなったことをも意味すると思われる。そこで次に為替相場の動きをみることにしよう。

ホートンの週報が、ロンドンとヨーロッパの主要都市との間の為替相場を掲載するようになるのは、1695年1月18日号からだが、発行日の2～3日前の相場であることが、このばあいだけ付されている日付によって示されてい

29) Rogers Ruding, *Annals of the Coinage of Britain*, 3d. ed., 1840, Vol. II, p. 46.

30) *ibid.*, p. 57.

31) *ibid.*, p. 66. これから換算すると標準金1オンス=77シリング10½ペンスとなる。

32) *ibid.*, p. 43.

33) *ibid.*, p. 47.

第2表 ロンドン＝アムステルダム間の為替相場の推移（1ポンド・スターリン
グ当りオランダ通貨建て）

<u>1695</u>	11月 5 27	11月 2 37.4	8月 2 35.4	2月 7 35.7
1月15 32.7	11 27.5	" 10 37	9月13 35.5	3月 7 37.2
" 29 32.6	19 27.8	" 17 37.9	10月 4 35.4	4月 4 37
2月26 32.4	26 28.4	" 23 37.7	11月 1 35.4	5月 2 35.11
3月12 31.10	12月 2 28.3	" 30 37.8	12月 6 35.5	6月 6 36.3-4
" 19 31.1	10 29	<u>1697</u>	<u>1699</u>	7月 4 36.2
4月 2 31.3	17 30.10	1月 5 37.2	1月 3 35.5	8月 1 36.5
" 9 31.2	<u>1696</u>	" 8 36	2月 7 35.3	9月 5 36.6
" 16 31.4	1月 3 29	" 26 36.3	3月 7 35.4	10月 3 36.6
" 23 31.2	10 30	2月 2 36.7	4月 4 35.3	11月 7 36.7-6
5月 2 31.6	24 31	" 16 36.2	5月 9 35.3	12月 5 36.6-7
" 16 31.2	2月 4 30	" 23 36.3	6月 9 35.2	<u>1702</u>
" 21 30.10	11 29.6	3月 2 36.5	7月 4 35.1	1月 2 36.7
" 29 30	18 29.10	" 9 36.8	8月 8 35.5	2月 6 36
6月 4 29.1	25 29.9	" 16 36.6	9月 5 35.6	3月 5 35.10
" 12 29.4	3月17 29.3	" 30 36.5	10月10 35.6	4月 3 35.7-8
" 19 29.2	24 29.8	5月11 36.3	11月 7 35.5	5月 1 35.10
7月 2 29.3	27 30.10	" 28 35.8	12月12 35.8	6月 5 35.7
" 9 29.2	4月10 29.8	6月 2 35.8	<u>1700</u>	7月 3 35.3
" 16 29	21 30.3	7月 6 35.7	1月 2 35.8	8月 7 35.1-2
" 23 28.5	28 30.1	8月 3 35.9	2月 6 35.5	9月11 35.1-2
" 30 27.5	5月19 30.6	9月 7 35.9	3月 5 35.7	10月 2 35.3-2
8月 6 27.2	6月 9 30.4	10月 1 35.6	4月 9 35.8	11月 6 34.10
" 13 27	16 30.2	11月 2 35.8	5月14 35.8	12月 4 34.10
" 20 27.4	30 30	12月 7 35.7	6月 7 35.7	<u>1703</u>
9月 3 28.1	7月14 29.3	<u>1698</u>	7月 5 35.6	1月 1 34.9
" 10 28.3	28 33.7	1月 4 35.9	8月 2 35.7	2月 5 34.5-6
" 17 28.7	8月 5 33-32	2月 1 35.9	9月 5 35.6	3月 5 36.6-5
10月 1 29	21 28.10	3月 8 35.9	10月 4 35.7	4月 2 34.1
" 9 28.4	9月10 35.2	4月 4 35.9	11月 1 35.6	5月 7 34.4
" 16 28.2	29 36.5	5月 6 35.6	12月 6 35.6	6月11 34.3-4
" 22 28	10月 6 36.8	6月 7 35.6	<u>1701</u>	7月 2 34.2-3
" 29 27.8	20 31.6	7月 5 35.4	1月 3 35.8	8月27 34.2

注 1697年5月までは、相場に変化が起ったばあいの日付と相場、それ以後は毎月の最初に記録されている相場。

出所：Houghton, *A Collection*, の各号より。

る。第2表は、その中からアムステルダムとの為替相場をぬき出して、変化があったときの相場だけをその日付とともに記したものである。ロンドン＝アムステルダム間の為替相場は、ロンドンからみて外貨建てで表示されており、為替平価は1ポンド・スターリングに対し37シリング4/9ペンス・グロスであるとジャスティスは言っている。³⁴⁾ これはオランダとイギリスの銀鑄貨に含まれる銀純分を鑄造価格にしたがって計算して比較したものである。この平価から計算すれば、1695年1月15日のアムステルダムとの為替相場32シリング7ペンス・グロスは、ロンドンからみれば平価を12%も下回っており、アムステルダムからみれば13.7%のプレミアムである。すなわち、ロンドンでアムステルダム宛為替を買うには平価のばあいよりも13.7%余計にポンド・スターリングを支払わねばならないのである。ところがこの対アムステルダム為替の相場は、イギリスの側からみてますます低落の一途を辿り、同年の8月13日（発行日は16日）にはついに27シリングの底値に達する。これはイギリスからみれば27.1%の下落だが、オランダからみれば37.2%のプレミアムである。その後為替相場は、9月1日のナムールの奪回³⁵⁾を反映

34) Alexander Justise, *A General Treatise of Monies and Exchanges*, London, 1707, p. 56. なおこの平価は、ジャスティス自身による計算の根拠は示されないで、リカード (Ricard) という人のフランス語の著書から紹介されているものである。したがって信頼性について若干疑問が残る。たとえば、同じリカードによれば、ロンドン＝パリ間の為替平価は、1フランス・クラウンに対し54ペンス（このばあいはロンドンからみて内貨建て）となっているが、ジャスティスは別の箇所では、「平価には二種ある」と言い、フランスとの「現実貨幣の平価」（これは、ある国の現実の正貨と他の国のそれとの内在的価値の同等さを現わす、とされる）は、1クラウンにつき4シリング6ペンス（つまり54ペンス）だが、「為替平価」は3シリング9ペンス（つまり45ペンス）である、と云っている（*An Introductory General Discourse of Moneies and Exchanges* pp. 3~4）。そして、ロンドン＝パリ間の為替相場の動きをみると、どうも後者の方が正しいと思われるのである。また、1697年に書かれている匿名のパンフレット（*A Short Treatise of the Reason and Cause Why our Money & Bullion have been Exported, for many years last past*, London, 1697, p. 7）の数字によって、対オランダ為替の平価を計算してみると1ポンドは約34シリング3ペンス・グロスとなる。

35) W. Marston Acres, *The Bank of England from Within 1694-1900*, Vol. 1, London, 1931, p. 54.

してか、9月に入ってからやや持ち直すが11月には再び悪化し、ようやく年末に至って30シリング台を回復するようになった。ところが、銀地金の価格が鑄造価格に落ち着いた1696年7月10日以後も、為替相場はかなり大幅な乱高下をみせたが、9月になって急上昇し11月には平価を上回るに至り、それ以後は安定した動きをみせるようになったのである。

さて以上で、銀鑄貨の状態と、物価、金・銀の価格および為替相場の動きを概観したが、ここから何がわかるだろうか。

まず、銀鑄貨の状態と物品との関連についてみると、鑄貨の磨損状態はかなり以前から進んでいたにもかかわらず、物価の騰貴が始まるのは1692年の後半からであること、また、磨損が一層進んだとみられる1694年の秋から95年の夏にかけて物価が急落していること、さらに、磨損鑄貨の回収が半年以上も前に済んでいる1697年の春から、物価の持続的上昇が起って1699年の秋まで続いていること、などから両者の関連は一見して否定されうるだろう。ただひとつ、1695年夏から1696年の夏にかけての物価の急上昇は、磨損鑄貨の回収を像想してのその流通速度の増大や、96年5月4日までは政府への支払いに磨損鑄貨を用いることから起きた削り取りの促進³⁶⁾と照応するかもしれないし、1696年夏から翌年の初めにかけての物価の急落は、磨損鑄貨が回収されてしまっても新鑄貨の鑄造は徐々にしか行なわれえないことに由来する流通鑄貨の不足と、それに起因したイングランド銀行の危機³⁷⁾を反映するものかもしれない。なお、1697年初めから1699年秋までの持続的物価

36) Ruding, *op cit.*, p. 43.

37) 1696年5月4日までに国庫に払いこまれた磨損鑄貨は400万ポンド・スターリングに上ったといわれるが、新貨幣の発行が緩慢であったため、イングランド銀行は現金需要に応ずることが困難になり、同行の手形や銀行券に対して現金の分割払いをするようになった。現金不足は7月には一層深刻になり、政府はイングランド銀行の信用を支持することの重要性を感じ、5ポンドから100ポンドまでの大蔵省証券を、7月14日にはじめて発行し、金属貨幣の代用物として流通させたが、これが事態を緩和させるのに役立った、といわれている (Acres, *op. cit.*, pp. 68-72)。

騰貴が、新鑄貨の発行の増大³⁸⁾に見合うのではないか、と思われるかもしれないが、新鑄貨が完全量目をもっていることからすれば、それは価値章標たりえず、したがってその数量の増加によって貨幣価値低下（つまり物価騰貴）の原因とすることは正に貨幣数量説に陥ることになるし、また、新鑄貨は鑄造されるや否やその多くが退蔵されたり熔解されて、流通から消え去ってしまったこと³⁹⁾を考えれば流通鑄貨が増えたかどうかも疑わしい。

次に為替相場との関連をみると、1695年1月からのデータしかないのだが、すでにそのときは対アムステルダム為替相場は12%も下落していたのだから、為替の下落は物価の騰貴と相前後して起ったものと推定することは可能だろう。しかしその後の為替の動きと物価の動きとの間に有意義な相関を認めることは困難である。すなわち、1695年1月から1696年夏までは両者はほとんど逆相関の動きを示しているし、1697年初めからは物価は2年半におよぶ持続的上昇を示したのに、為替の方は平価の近傍での著るしい安定性を示しているのである。わずかに、1696年夏以降の為替の急速な回復と物価の急落が一致しているにすぎない。だがもう少しさかのぼって、1695年夏以降約1年間の物価の急上昇も、95年8月半ばに底値に達したもののその後もはかばかしい回復を示さなかった為替の状態、に照応したものとみることも不可能ではない。すると少くも、1695年の夏から1697年初めまでの物価の動きは、その間の為替相場の動きと一応の相関を示しているものとみることができる。1695年1月以前の為替相場のデータを欠くのがいかにも残念だが、当時の物価の動きの少くとも一部は為替相場の動きと照応していたわけである。では、物価が為替に影響したのだろうか、それとも逆だろうか。この問題に答える前に、銀地金相場の動きとこれらとの関連をみてみよう。

銀地金の市場価格が1694年夏頃から持続的な上昇基調となり、1695年の9

38) 1696~1698年(ロンドンのみ1699年まで)の全鑄造額は、ロンドン塔のミントで5,091, 121 l. 7s. 7d. 地方のミント5カ所で1,791,786 l. 12s. 0d. で計6,882,907 l. 19s. 7d. である (Oman, *op. cit.*, p. 342)。なおルディングの数字はこれより地方ミントの分で1l. (ポンド) 多くなっている (Ruding, *op. cit.*, p. 57)。

39) Ming-Hsun Li, *op. cit.*, p. 143。

月に 6 s. 5d. (6 シリング 5 ペンス) のピークをつけ、以後12月初めまでそれに近い水準を推持したあと、1696年1月10日には 5 s. 11d. に下落し、さらに7月10日以降は 5 s. 2 d. の鋳貨価格に戻ったこと、はすでに述べた。すなわち、磨損鋳貨の回収と完全量目の新鋳貨の発行によって、一方では銀地金の価格が下落するとともに地方では、通貨の不足による物価下落と為替相場の改善（これには対仏戦争の終結が近いことによる、海外軍事支出の縮小や、閉ざされていた貿易の再開による収支の改善、なども影響しているかもしれない）とを同時に生み出したものとみることができよう。だからこのばあい、物価と為替とどちらを因とも果ともいえず、むしろ、鋳貨の改善とその数量の縮小が両者に同じ方向の影響を与えた、ということになる。

それでは、1695年夏に、流通鋳貨の磨損状態が平均して50%近くに達していた時、これと銀地金価格および為替相場との関連はどのように考えるべきだろうか。ホートンの週報が報ずるかぎりでは、銀地金価格のピークは9月13日の 6 s. 5 d. これは前年の最低価格でもある鋳造価格の 5 s. 2 d. と比べれば、24.2%の上昇である。また対アムステルダム為替相場の底値は、8月16日の 27 s. グロスで、これは平価に比べて27.1%の下落だが、アムステルダム宛為替のポンド価格の上昇としてあらわせば、37.2%の上昇である。鋳貨が平均して約半分に磨損していたのに、外国為替の騰貴率も銀地金価格の上昇率も、はるかにこれに及ばなかったことは、平均水準に磨損した銀鋳貨によっては価格の度量基準機能が果たされたのではないこと、を明らかに示している。では何が価格の度量基準として機能していたのだろうか。

銀地金の価格が価格の度量基準をあらわすと考えるばあいに問題点が二つある。一つは、銀地金の最高の上昇率24.2%とアムス宛為替の最高の騰貴率37.2%の間に13%の乖離があることで、もう一つは、外国為替の相場がピークに達したのが8月半ばであるのに、銀地金相場がピークに達するのは9月に入ってからである、という時間のズレである。ちなみに金地金およびギニア金貨の方をみると、いずれも6月14日にピークに達しており、その上昇率

は前年の最低値 (80 s. と 21 s. 10d.) に比べて、それぞれ 36.3% と 37.4% である。こちらの方がアムス宛為替の騰貴率 37.2% にほぼ一致する。だから、当時すでに金の方に価値尺度機能が移っていたのではないかと、という疑問が生ずる。そしてこれは、間もなく現実の問題になるのだが、当時はまだそうなっていないと判断される。というのは、第 1 に、これではあまりに外国為替の騰貴率に近すぎて、現送費用の入りこむ余地がないし、第 2 に、金の価格のピークがすぎてから外国為替のピークがくるといふのは理解しがたいからである。カンティヨンによれば、彼が著述していた時代——アインチッヒはそれを 1730 年代としている⁴⁰⁾——における正貨現送費は、パリ＝アムステルダム間は 5～6%、インド＝イギリス間は 10～12% であるのに、ロンドン＝アムステルダム間は、平時には 2% を超えることは殆どない、とされている。⁴¹⁾ しかし、これはあくまで「平時」のことであり、アインチッヒによれば、17 世紀の末頃のイギリスとアイルランド間の正貨積出費でも 6% であった、といわれ、1696 年には 15% のディスカウントでもダブリンで為替手形を買う方が有利だった、といわれている。⁴²⁾ したがって、対仏戦争中の 1695 年には、ロンドン＝アムステルダム間の現送費は、かなりの大きさに達したであろうことは推定されうる。だから、銀地金価格の上昇率とアムステルダム宛為替の上量率の開きは、この現送費によって説明されうると思われる。また、両者のピークの時間のズレも、ポンド相場下落が先行し、それによって生じた銀の輸出需要によって銀の価格の上昇が起った、と考えれば無理なく理解できると思われる。

つまり、当時は銀の市場価格が価格の度量基準をあらわしていたが、銀の現送費が大きかったため、為替の実質変動も大幅になり、それだけ銀の市場価格を越える外国為替の騰貴が生ずることになったのである。銀の市場価格

40) P. アインチッヒ著、小野、村岡訳『外国為替の歴史』ダイヤモンド社、昭和 40 年、151 ページ。

41) Richard Cantillon, *Essai sur la nature du commerce en général*, trs. Henry Higgs, London, 1931, p. 253.

42) アインチッヒ、前掲書、同ページ。

が1696年7月には鑄造価格に戻ったのに、その後3カ月ほどは為替相場の大
幅な乱高下が生じたのも、この理由からと思われる。

銀鑄貨の磨損状態は銀地金の市場価格が上昇する限界を規定するだけで
あり、⁴³⁾その限界内のどこまで銀の価格が上昇するかは、ポンドの為替相場が
どこまで下落するかに依存している。ポンドであらわした外国為替の騰貴率
から銀現送費の比率を控除した所まで銀の価格は上昇するのである。しかし、
鑄貨の状態が価格の度量基準と全く無関係であるわけではない。たとえば、
1696年7月のように、銀鑄貨が完全量目に回復されれば、銀の価格は鑄造価
格に復帰する。つまり、このばあいには、単位貨幣名をもつ鑄貨自体が価格
の度量基準として機能している、といえるかもしれない。とはいえ、鑄貨の
輸出と鑄潰しを禁じている当時の法律の下では、たとえ鑄貨の量目が完全で
あっても、銀の輸出需要が生ずれば、銀地金の市場価格は鑄造価格を越えて
数パーセント（1オンス当り2～3d. ——これは鑄貨を鑄潰して輸出する
ばあいのリスク負担費に当る）は騰貴したのであり、為替相場のそれ以下へ
の下落が銀地金の輸出によって防がれていたかぎり、この銀地金の市場価格
が価格の度量基準をあらわすことになるのは変りない。この銀鑄貨と銀地金
価格との関係は、磨損鑄貨が流通しているばあいも同じである。鑄貨が平均
して50%近く磨損していたとしても、個々の鑄貨の磨損度は異なるはずで
あり、したがって、比較的完全量目に近い鑄貨は、銀の市場価格がある程度上
昇すれば、鑄潰して輸出する方が有利となる。すなわち、鑄貨が実際にもっ
ている銀量の価格が、鑄貨が流通においてもっている価値（つまり鑄貨の貨
幣名）以上になれば、その鑄貨は流通から引き上げられて、地金に転化され
るのである。だから銀の市場価格が6 s. 5 d.（24.2%の上昇。価格の
度量基準の切り下げ率としてみれば、19.5%）でピークをつけたというこ
とは、磨損の度合が20%ほどに進んだ鑄貨までが地金に転化されえた所で、為

43) 富塚氏もこの点は正当に指摘されている（第2論文，4ページ）。

替相場下落が止まった、ということなのである。

以上のことからいえることは、磨損鑄貨の流通の一般化は、価格の度量基準の事実上の切り下げを可能にする条件ではあるが、それ自体としては度量基準の変更を惹起するものではなく、度量基準の事実上の変更は、為替の下落が進行して、増大している現送費を考慮してもなお銀の現送の方が有利となる点まで達した時に、はじめて起ったということである。

さいごに、物価が価格の度量基準の変更の指標であったか、といえ、ホートンの週報に掲載された諸商品の価格をみるかぎり、その動きは銀の市場価格のそれとは逆相関ないしは無関係なことが多く、とくに、1697年の初めから2年半にわたって上昇し続け、その後2年余にわたって大幅に下落するという動きは、銀の市場価格が鑄造価格の近傍に固定してから起ったものであり、この点だけからみても、物価を価格標準変更の指標とすることは不可能に近い、といえよう。

以上、きわめて粗雑ではあるが17世紀末のイギリスの事情を概観し、そこから一応の結論めいたものが引き出せたので、この事態についてのマルクスの説明にもう一度戻って、それに含まれる問題点を摘出することにしよう。

(3) マルクスの説明が含む問題点

『経済学批判』からの引用②の後半と引用③とを一括してもう一度みてみよう。

「イギリスやフランスやの、政府による貨幣悪鑄の歴史をみると、価格が銀貨の悪化されたのと同じ比率では騰貴しなかったことが、しばしばみいだされる。これはもっぱら、鑄貨の増加された比率が、それが悪化された比率におよばなかったことによるものである。つまり商品の交換価値は、そのごは価値の尺度としてのこのより低い金属混合で評価され、この低い度量単位に相応する鑄貨によって実現されるはずであったのに、その金属混合がそれに照応する数量だけ発行されなかったからである。このことは、ロックとラウンズとの論争で解決されなかった困難を解決するものである。

紙券にせよ悪鑄された金や銀にせよ、価値表章が、鑄貨価格にしたがって計算された金や銀の重さを代理する比率は、それ自身の材料によってきまるのではなくて、流通にあるその量によってきまるのである。』⁴⁴⁾

第一に、最初に引用した時にも触れたように、「政府による悪鑄」が鑄貨価格 (mint price) の引き上げを伴うことなしに行われたばあいのことをマルクスは考えているのかどうか、が問題となろう。もし鑄貨価格の引き上げを伴うならば、金または銀の市場価格は当然そこまでは上昇するから、鑄貨の代表する金属量は、その数量と無関係に、減少するはずである。また、もし悪鑄によって同一量の貴金属から鑄造される鑄貨の増加分がすべて鑄造手数料 (seigniorage) に吸収されるならば、鑄貨に含まれる貴金属は減少するだろうが、少くともさしあたりは、貴金属の市場価格には影響しないだろう。マルクスはこのようなばあいを念頭に置いているのかもしれないが、これはかなり不自然な想定である。なぜなら、そのばあいは鑄造手数料収入を増大させることを目的とする悪鑄ということになるが、そのような条件では、外国から貴金属が流入し続けている状態の下でもなければ誰もミントへ貴金属を持ちこまないだろうが、また貴金属が豊富に流入している時には、悪鑄に訴えなくとも十分鑄造料収入は確保できるはずだからである。

このような困難に逢着するのは、ここでマルクスが価格の度量基準の変更の指標として、金の価格を度外視して、もっぱら物価水準のみをみていることに起因している。これが一つの問題である。

17世紀末のイギリスの例をまつまでもなく、物価は価格の度量基準が固定されている下でも大きく変動する。この種の変動は価格の度量基準の変更が起っている時にもなくなるわけでは決してない。だから物価の動きだけから価格の度量基準の変更の有無や度合いを判断しようとすることは、元来不可能事なのである。抽象的な次元での説明原理で歴史的事実を判断しようとする

44) 『経済学批判』, 前掲訳書, 154-5ページ。

ることの誤りをマルクス自身が犯しているとしか考えられない。

「価値章標が代表する金属量は章標の量によってきまる」という抽象的な命題で、17世紀末の大改鑄直前のイギリスの実例、すなわち「為替相場も銀地金の銀鑄貨にたいする比率もともに、流通貨幣がその実際の銀量減損とははなはだしく異った割合で減価した事実を証明していた」⁴⁵⁾ こと、が説明できるとするのと同じ誤りに帰着すると思われる。

マルクスの説明からすれば、当時のイギリスの為替相場の下落や銀の市場価格の上昇は、磨損鑄貨の流通量が増大したのに比例して起ったことになるが、これを裏付ける事実をみつけるのは容易ではない。大改鑄の期間に鑄造された新銀貨は、額面で約690万ポンドに上るが、ルディングはその三分の二（約460万ポンド）が磨損銀貨からであったと推定している。⁴⁶⁾ これは磨損した銀貨のもつ額面金額だけでは、流通に必要な銀貨の量としては不十分であったことを意味するのかもしれない。また、ミントの分析試験管であったヘインズが1700年頃書いた手稿によれば、1695年に流通していた銀貨は1000万ポンドと推定されているが、⁴⁷⁾ 改鑄に際して回収された磨損鑄貨の額との開きの大きさ（500万ポンド）を考えれば、これは、重い銀貨もなおかなり流通に存在しつづけたことを意味する。なぜ1695年のような条件の下で重い鑄貨が流通界に存在しうるかといえは、鑄貨の磨損の度合いは場所によって異なることと、磨損の度合いによって鑄貨の購買力に差異が生ずることである。マコーレイによれば、リバプールとかマンチェスターなど北の方の地方では磨損はまだ始まったばかりであり、ギニア金貨の価格も、北の地方では22 s. であるのに、ロンドンに近づくにつれて上昇し30 s. に達した、という。⁴⁸⁾ オーマンも、ギニアの価格が引渡される銀貨の性格に応じて異な

45) 同上、95ページ。

46) Ruding, *op. cit.*, p. 57.

47) Hopton Haynes, *Brief Memoires Relating to the Silver and Gold Coins of England*, Goldsmiths Library MS72 ただしここでは Ming-Hsun Li. *op. cit.*, p. 31 でその概要を知った。

48) Thomas Babington Macaulay, *The Works of Lord Macaulay*, Vol. 8, 1906, p. 77

り、機械製のクラウン貨（1クラウン＝5s.）4個と完全な重量の2個の新シリング貨と引き替に入手できる1ギニアは、磨損鑄貨に対しては28s.以上が要求された、と述べている。⁴⁹⁾ また、磨損鑄貨の流通が惹起した幣害として、商取引が円滑にいかなくなり、店頭での口論が絶えず、契約を結ぶ前に、支払いに用いられる鑄貨を決定することが必要となったことが指摘され、賃金についても、支払われる鑄貨の磨損によってその購買力がちがってきた、といわれる。⁵⁰⁾

いずれにせよ、当時のイギリスについて、磨損鑄貨の流通数量が増大するのに比例して、その代表する銀量が減少した、などということは所詮は見当はずれのそしりを免れない。しかもこの点は、抽象的次元の論理を歴史的現実そのままあてはめた、という誤りだけには止まらない問題を含んでいる。それは、価値章標の流通下における現実の物価騰貴や為替下落などを、もっぱら通貨の側の事情によって説明しようとする、リカードウと共通の立場がそこに見出せるからである。

実は、ラウンズとの論争においてロックによって回避された「微妙な経済的問題」⁵¹⁾の発見者はマルクスではない。マクラーレンによれば、問題の発見者はリバプール卿であり、問題を解決したのはリカードウ氏である、という。⁵²⁾ リバプール卿（チャールズ・ジェンキンソン）は、その著書の中で、当時銀貨の磨損が殆ど重量の半分に達していたのだから、ロックの主張の通りならば、銀地金の価格はオンス当り10s.に、ギニア価格は44s.にならなければならないのに、そうはならなかったことに注目して、「これらの事実は、鑄貨に含まれる金属の内在的価値の他に、王国内でのみ流通する鑄貨の価値に影響する他の原因があることを推定する強力な理由を提供している」

49) Oman, *op. cit.*, p. 340.

50) Macaulay, *op. cit.*, p. 79.

51) 『経済学批判』前掲訳書、95ページ注47。

52) James Maclaren, *A Sketch of the History of the Currency, etc.*, London, 1858, pp. 24-5.

といっている。⁵³⁾ リバプール卿自身はこの「原因」を捉えることはできなかつたけれども、この解決をマクラレンは、リカードウの「ボウズンキト氏への回答」の中に見出したのである。リカードウはいう。「1696年の改鑄以前では、地金の価格は、その当時の通貨の品位の低下された状態から期待されるほど高くは騰貴しなかつた、という事実を説明するにちがいない理由もまた、この原理に基づいている。すなわち、その量は通貨の品位が低下されたのと同じ割合では増加させられなかつたのである」⁵⁴⁾ と。同じ趣旨のことは『経済原理』第27章でもいわれている。しかもそこでは、紙幣の流通と同じ原理に基づくものとして説明されている。

「紙幣が流通するのはこの原理に基づくのである。紙幣の全製作費は鑄造手数料とみなされうるだろう。それはすこしも内在価値をもたないけれども、しかも、その数量を制限することによって、その交換価値は、相等しい称呼の鑄貨、またはその鑄貨に含有される地金と、同じ大いさになる。また、同じ原理にもとづいて、すなわち、その数量の制限によって、劣質の鑄貨も、それが、実際に含有する金属量の価値でではなくて、それが法定の量目と品位とをもつばあいには保有すべき価値で、流通するであろう。したがって、ブリテンの貨幣鑄造史のなかで、われわれは、通貨がけっしてその品位の低下と同じ割合で減価しなかつた、ということを知るのであるが、その理由は、その数量が、けっして、その内在的価値の減少に比例して増加することがなかつたことに、あるのである。」⁵⁵⁾

『経済学批判』の引用③の箇所でのマルクスの説明が、これと寸分ちがわぬものであることは明らかである。そしてまた、『経済学批判』のこの箇所が、紙幣の減価の指標をもつばら物価騰貴に求め、紙幣の減価の原因をもつ

53) Charles Jenkinson, *A Treatise on the Coins of the Realm*, 1805, reprinted by Kelley publishers, 1968, pp. 88-90.

54) 『リカードウ全集』, III, 265ページ。

55) 同上, I, 405-6ページ。

ばらその過剰に求める、というわが国のマルクス経済学者の伝統に、一定の影響を与えたことも否めない、と思われる。

(4) ダヴナントによる事態の解明

ところで、マクラーレンは見逃してしまったようだが、1695年の時点ですでに問題に気づき、それに対する解釈を示した人が実際にいる。それはチャールズ・ダヴナントである。彼は、その年に書いた手稿の中で、銀貨の貨幣呼称の引き上げ（ラウンズ案）に反対すると同時に、銀貨を改鑄することの不要性を主張しているのであるが、それは彼が、当時の諸困難の主要な源泉は、鑄貨の状態ではなく、貿易と為替の状態にあると考えたからであった。

たとえば彼は、当時の物価騰貴の原因を自らに問うて、輸送用の財の価格が他よりも大きく上昇していること、鑄貨の状態が完全であっても突然の需要によって商品の価格は上昇すること、戦争によって労賃と外国産の原材料の価格が上昇していること、などから、「わが貨幣の悪化よりも、海外との為替の状態と、戦争が貿易にもたらした困難とが、大部分の商品の高価格を惹起したものと思われる」⁵⁶⁾と結論しているのだが、それに続いてかの「微妙な問題」に触れている。

「これまで論じられてきたように、もし貨幣呼称が引き上げられたばあい、人々は自分の財の価格をそれに応じて引き上げるものであるならば、そして、そのことによって、内在的価値と内在的価値とを交換しようとする人々の願いが叶えられるのであるならば、一般的に言って貨幣の内在的価値が半減している時に、なぜすべての物の値段が以前の二倍になっていないのだろうか。また、なぜこの貨幣の悪さが全商品の高価格の唯一の、あるいは主要な、原因ではないのだろうか。」⁵⁷⁾

別の箇所では、金の価格と海外の為替においては、銀貨の悪化が真の作用

56) Charles Davenant, "A Memorial Concerning the Coyn of England", Nov. 1695, in *Two Manuscripts by Charles Davenant*, Baltimore, The John Hopkins Press, 1942, p. 25.

57) *ibid.*

をもつことを述べて後、しかし為替は、銀貨の軽さからすれば当然50%近く下落するはずなのに、全体として27~8%しか下落していないことを指摘している。⁵⁸⁾

物価が鋳貨の悪化と同じ割合では騰貴しなかったことをダヴナントは主として信用によって説明している。つまり、国内での大量取引と外国貿易の大部分は信用で遂行されており、鋳貨は小売業の部面でのみ流通しているが、信用での大量取引は以前の貨幣価値に対して計算されているので、それが国内での貨幣の価値を維持するのを助けており、したがって国内取引の大部分が、正貨を介在させず信用によってのみ遂行されることが存続するかぎり、鋳貨自体も小売業では、「法律と慣習から得ている価値で」流通しつづけることができる、というのである。⁵⁹⁾ 次いでダヴナントは言う。「対外商業の悪い状態から主として生まれている原因がなければ、小売業におけるシリング貨や半クラウン貨はその内在的価値の不足にもかかわらず、以前とほとんど同じ価値を市場でもちつづけたらろう」⁶⁰⁾ と。

だからダウナントによれば、鋳貨の内在的価値の減少は、それ自体としては何らその機能上の価値に影響するものではなく、戦争による為替の下落と貿易の悪化とが、その価値を下落させている、というのである。

では、鋳貨の平均磨損度にまでなぜ為替が下落しなかったのか、という点についてダヴナントは、「貨幣が他の信用によって助けられ強められた」ことと共に、「これまでわれわれは、われわれの負う超過差額を決済するために、地金の代りに（損失と不利益を受けながらも）送るべき商品を持っていた」こと、を挙げている。⁶¹⁾ すなわち、鋳貨は海外ではその内在的価値によってしか評価されないのだから、平均して半分にまで磨損している鋳貨を送金するよりも、商品を送って差額を満たす方が利益である、と商人が考えるよう

58) *ibid.*, p. 38

59) *ibid.*, pp. 25-6.

60) *ibid.*, p. 27.

61) *ibid.*, p. 38.

な商品がまだ存在したこと、それが、鑄貨の磨損度に見会う点までは為替が下落しなかった理由である、とダヴナントは言っているのである。

ダヴナントによる問題の認識とその解決は以上のようなものであるが、みられるように彼は、物価の騰貴についても為替の下落についても、その原因を鑄貨の状態には全く求めていない。彼はそれらの原因をもっぱら、戦争によって貿易が蒙っている困難（海上における船舶の損失など）と、海外において軍隊を維持するための大量の送金の必要とから、説明しているのである。

この立場は、一世紀後のナポレオン戦争期の銀行制限時代に起った、物価騰貴と為替下落および金地金価格の高騰についての、リカードウの説明とは全く対照的なものであることは明らかだが、マルクスは、『経済学批判』の当該箇所では、リカードウと同じ立場から17世紀末の現象を説明しようとしたのである。『資本論』の第一篇にはこの問題についての言及は見当たらないが、それは単なる形式的な「叙述の改善」⁶²⁾以上の意味をもっていると思われる。

III むすびに代えて

以上で扱った紙幣流通および磨損鑄貨流通についての理解は、当然今日の事態にそのまま適用することはできない。それらのばあいには、少なくとも主要な貿易の相手国では、金あるいは銀の金属本位が採用されていることが前提されていたからである。今日では金は、世界的規模で、通貨制度の基礎から外されている。これが基本的な差異である。金の基礎を失っているものを制度と呼べるかどうかは問題だが、逆にいえば、今日金が貨幣としての機能を果たしているかどうかが大問題である。しかし、金に代るべき貨幣商品を見出すことができないのも事実である。すると解釈は次の二つしかないことになりそうである。すなわち、貨幣というものは商品価値に価格形態を与え

62) 『資本論』前掲訳書、69ページ。

てしまえば、その歴史的役割を終わりあとは不要となる、と考えるか、それとも、今日でもなお金は貨幣商品なのだが、その貨幣としての機能は著しく妨げられており、部分的または潜在的にその機能を果たしているにすぎない、と考えるかである。筆者としては後者の考えをとりたいのだが、それに沿った論理の展開は、別稿に期したいと思っている。